

2021年6月27日聖霊降臨後第5主日説教

申命記 15 章 7 節-11 節

コリントの信徒への手紙二 5 章 14 節-21 節

マルコによる福音書 5 章 22 節-24 節、35 節 b-43 節

新しい主教教書が発行されました。「7月4日（聖霊降臨後第六主日）」より公禱の礼拝再開が可能となります。わたしたちの教会としては、7月11日の教会について、再開に必要な事柄を再検討したのち、7月18日から再開となると思います。

本日の旧約日課は、貧しい人への配慮について記している「申命記」の部分です。使徒書は、引き続き「コリントの信徒への手紙二」であり、パウロが他の教会への援助を勧めている個所です。本日の福音書は、これらの二つの個所の趣旨と、内容が少し異なります。そして本日の個所は、途中が完全に省略されています。それゆえ、本日は、福音書を中心にお話ししたいと思います。

聖書日課の福音書は、会堂長ヤイロとその娘のお話だけになっていますが、間には、十二年間出血が止まらなかった女性のお話があります。一つのお話の中に、別なお話を挟み込む構成は、「マルコによる福音書」の特徴の一つです。物語としての「マルコによる福音書」の全体性を考えたとき、二つの話が一つとなっていることに意義があります。

悪霊に取りつかれたゲラサの男の癒した後、イエス様と弟子たちは舟に乗って湖の向こう岸へと向かいます。そこでも数多くの群集が集まります。その群衆の中に、会堂長の一人でヤイロという男がいました。お話は、彼がイエス様の足元にひれ伏し、自分の娘の癒しを願うところから始まります。

会堂長というのは、ユダヤ教の礼拝場所である会堂の管理者です。律法の指導などの教学担当者というよりも、行政・管理担当者の代表です。その意味では、その会堂のある地域社会で地位と名誉がある立場の人です。そのような人が、群衆がいる中、「イエスを見ると足もとにひれ伏して、しきりに願った」（マルコ 5：22-32）のですから、どれだけ必死であったかがわかります。イエス様はすぐに願いに応じて出発し、群集もついていきますが、彼らの動きは、突然、十二年間出血の止まらなかったという女性の物語によって中断されます。省略された部分は以下の通りです（マルコ 5：25-35a）。

さて、ここに十二年間も出血の止まらない女がいた。多くの医者にかかって、ひどく苦しめられ、全財産を使い果たしても何の役にも立たず、ますます悪くなるだけであった。イエス様のことを聞いて、群衆の中に紛れ込み、後ろからイエス様の服に触れた。「この方の服にでも触れればいやしていただける」と思ったからである。すると、すぐ出血が全く止まって病気がいやされたことを体感じた。イエス様は、自分の内から力が出て行ったことに気づいて、群衆の中で振り返り、「わたしの服に触れたのはだれか」と言われた。そ

ここで、弟子たちは言った。「群衆があなたに押し迫っているのがお分かりでしょう。それなのに、『だれがわたしに触れたのか』とおっしゃるのですか。」しかし、イエス様は、触れた者を見つけようと、辺りを見回しておられた。女は自分の身に起こったことを知って恐ろしくなり、震えながら進み出てひれ伏し、すべてをありのまま話した。イエス様は言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。もうその病気にかからず、元気に暮らさなさい。」イエス様がまだ話しておられるときに、

この女性には、ヤイロと異なり名前の記述がありません。しかし、彼女が今までどのような生活をしたのか、なぜ群衆の中から突然登場したのかについて、細かい説明がなされています。最初に「十二年間も出血の止まらない」とあります。その説明では、出血の箇所がわかりません。しかし、「出血が止まらないこと」、それは彼女がレビ記一五章等に基づいて不浄とされていることを意味します。つまり彼女は、ほかの人と接することは許されず、宗教的にも社会的にも疎外されてきたのです。また「多くの医者にかかって、ひどく苦しめられ、全財産を使い果たしても何の役にも立たず、ますます悪くなるだけであつた」とあります。彼女は、十二年間に及ぶ身体からの肉体的・社会的・宗教的な苦しみだけではなく、経済的にも極めて切羽詰った状態であつたのです。もう何もない状態といえます。

しかし、彼女は、イエス様についての何らかの噂か、宣教の言葉を聞いたのか、イエス様に唯一の希望を持ったようです。そのことは、「この方の服にでも触れればいやしていただける」（マルコ 5：28）という彼女の言葉に示されています。この「癒していただける」は原文を直訳すれば、「救われる」です。ここは、「いやしていただける」ではなく、原文の直訳として、「救われる」と訳すことに意味があります。単に直訳の方がよいということではありません。もう何も残されていない状態の彼女は、出血の治療という具体的な目的を超えて、とにかく救いを求めていたと考えられるからです。だから「救われると思った」と書かれているのです。そして、その思いと対となるように、イエス様も、群衆の中で彼女を懸命に探し、「娘よ、あなたの信仰があなたを救った」（マルコ 5：34）と語るのです。

お話の描写をさらに細かく見ますと、彼女の行動は、勇気を必要としていることがわかります。彼女は「群衆の中に紛れ込み、後ろからイエス様の服に触れた」（マルコ 5：27）とあるからです。不浄とされた彼女は、本来ならば、ほかの人たち、群衆の中に紛れ込んではいけません。今日でいう、ソーシャルディスタンスをより広くとらなければなりません。もちろん、イエス様を含めて、ほかの人に触れてもいけないのです。この点は、1章40節から45節の既定の病の人（重い皮膚病の人）と状況が似ているといえます。

彼女の行動は、イエス様の意志とは関係なく、出血がすぐに止まるという奇跡を引き起こします。奇跡が、イエス様の意思とは関係なく引き起こされたのです。このような奇跡の発生は、「マルコによる福音書」の物語の中でも唯一

のものです。イエス様は、奇跡が起こった後に、「わたしの服に触れたのはだれか」（マルコ 5：30）と触れた人を探そうとします。なぜそうするのかについての説明はありません。弟子たちも、イエス様のその行為を理解できませんでした。「そこで、弟子たちは言った。「群衆があなたに押し迫っているのがお分かりでしょう。それなのに、『だれがわたしに触れたのか』とおっしゃるのですか」（マルコ 5：31）とある通りです。弟子たちは、常識的に考えています。おそらく多くの人イエス様の周りに集まって、服にも触れていたと思います。そのような状態の中で、誰が服に触れたかなどどうでもいいことと思えたのでしょう。

彼女自身の身体に起こったことは、彼女に恐れを抱かせます。つまり、自分でも治るとは思っていない、ただ、とにかくイエス様に触れば、何か救われる、そう思っていたと推測されるからです。つまり、彼女は、イエス様に触れることだけでも十分であると思ったとも推測されるのです。

彼女は、自分の身に起こった変化に恐れを感じました。皮肉にも彼女は、十二年間自分を苦しめてきた根源がなくなった瞬間、今までにない恐怖を体験したのです。しかし、彼女は、恐れましたが、逃げることもせず、再び勇気を出してイエス様の前に進み出て、全てを告白するのです。

彼女のこの行動が、イエス様が彼女を探そうとしていた理由を明らかにします。イエス様は、彼女の願いが、単なる肉体の癒しではないことを理解していたのです。さらに、病気の治癒で終わらせてはいけないことをも理解していたのです。単に、出血部分が治ればよいということではなく、彼女の十二年間の苦しみや思い、様々なことがらを受け止めることが必要だと分かっていたのです。それが、彼女自身の言葉にある救われることであるからです。イエス様は、そのことを理解して、「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。もうその病気にかからず、元気に暮らさなさい」（マルコ 6：34）」と救いを宣言するのです。

ここ（省略された物語）には、病気の癒しという事柄以上に、救いを求める女性の真摯な信仰と、その彼女全体を受け止めるイエス様との関係が描かれています。単なる病気の癒しのお話ではなく、宗教的な救い、人間の全体性の回復のお話であるのです。

しかしながら、彼女の出来事は、物語の流れに重大な変化をもたらしました。それは彼女とイエス様との話しが終わらないうちに、ヤイロの娘が死んだという情報をもたらされたからです。この情報の伝達は、一つの想像を促します。それは、もしイエス様がこの女性に時間を取られなければ、間に合ったかもしれないということです。そのような想像を知ってか、イエス様は「恐れることはない。ただ信じなさい」とヤイロに語ります。

イエス様がそのように語られたとしても、周囲の人々は、娘さんが亡くなった時点で信仰を失いかけているようです。なぜならば、ヤイロの家に着し、イエス様が子どもは死んだのではないと語ったとき、周囲の人々（彼らは）は

あざ笑ったからです。ヤイロもその人々（彼ら）の中に含まれるかもしれませんが。しかし、イエス様は、そのような嘲弄の中、ヤイロ夫婦とペトロ、ヤコブ、ヨハネの三人だけを連れて娘のいるところに行き、娘の手を取って「**タリタ、クム**」と語りかけます。すると少女は起きあがり歩き始めるのです。少女が歩き出した理由が、もう十二歳になっていたからだの説明がなされます。十二歳は、現代のイスラエルではバットミツバ（女子の成人式）の年齢ですが、イエス様の時代では不明です。十二歳についてそれ以上に説明がないまま、出来事自体が周囲の人々を驚かせます。お話はイエス様の禁止命令で閉じられますが、それは、ヤイロを含めた人々が、その後どう行動するか、読者の想像に任せています。

この物語は、明らかにヤイロとその娘のお話と、十二年間出血で苦しめられてきた女性のお話の二つが、一つとなることに大きな意味があります。ただし、『聖書』の小見出しには、「ヤイロの娘とイエスの服に触れる女」とあり、十二年という数の一致から、出血で苦しんでいた女性とヤイロの娘とが対比されているように見えます。しかし、実際に対比されているのは、出血で苦しんでいた無名の女性とヤイロという男性です。物語は、彼女とヤイロとを対比させながら、信仰とは何かを示しているのです。

社会的にも宗教的にも強い立場にあるヤイロも、イエス様への信仰を持っていました。他方で、出血で苦しんでいた女性は、イエス様にしかないという信仰を持っていました。ヤイロの娘が十二歳であったと言葉は、それ自体では意味がよくわかりませんが、出血していた女性の苦しみと関連させると意味を持ちます。彼女が苦しみ、そのような信仰に至るまでの一二年は、漠然とした長さではなく、一人の女の子が生まれてから、大人の仲間入りするぐらいの年月だということです。信仰を持っていたヤイロは、娘の死を告げられた後は、信仰が揺らいだように思えます。その後のヤイロの信仰がどうなるかは、読者の推測に任されています。それでは、このお話は、ヤイロのような弱い信仰ではなく、何があっても揺らがない信仰を持ちなさいと、語っているのかというと、そうではないと思います。出血していた女性は、強い信仰を持っていたと思いますが、自分の思いを超えた事柄が起こった時、恐れ・畏れを感じたからです。そして、もう一度イエス様の前に立つかを問われたのです。彼女はもう一度イエス様の前に立ち、自分自身のすべてを説明しました。それが信仰にとって大切なのです。そして、イエス様は、そのような彼女のすべてをしっかりと受けとめてくださったのです。信仰とは、信じる人にとっても、その対象である方についても、そのような全体性が向き合う関係の事柄である。そのことを今日の福音書は示していると思います。

教会は、礼拝を通して、この信仰を社会に示し、自分たちも霊的な養いを受ける場所です。もうすぐその礼拝が再開されます。心からその日を待ち望みたいと思います。そして、これからも、礼拝の様々な豊かさを深めていきたいと思っています。